

6月9日、坪井隆作訴訟の原告・被告尋問がされた、判事席には女性裁判長と法衣の男性、二名の裁判官とは異様であり、傍聴人も裁判所職員二名のみ、休憩を挟み3時間、判決は8月23日。

原告尋問に先立ち被告弁護士は、坪井との特異な軋轢を述べた、これに坪井は憎悪を剥き出しにして「年下の者が”殿”呼ばわりするとは何事だ」 弁護士からの書面に”坪井様”でなく”坪井殿”が赦せないという、声高に社会正義をいう坪井は、チンピラ右翼そのもので傲慢不遜な態度に終始、間違いなく裁判長の心証は悪い。

当日に”事件の傷害”の診断書を取った坪井は、直ぐに4人学生の親の職業・年収・生活状況の調査をして、相手が経済弱者なら、慰謝料請求しない意思であったと誇らしげに証言した、坪井の主張する犯行状況、坪井のブログにある記述の矛盾・齟齬など虚偽通報の追及、裁判長も被害時の状況を質問して、坪井は言葉に窮する立ち往生の連続である。

被告女性の尋問では、事件現場での位置・行動、警察・検察の取調べ状況、作成調書の内容に焦点をあてた質問が代理人よりされた。

ネットで見ると燃やせ殺せ事件の記事とは、真逆の痛々しく憔悴した質素な女性の姿は意外であり、終始に俯いて精神を病んでいるように見えた、三月の停学処分を受け事件報道から引籠りとなった、女性の卒業式(東京)まで坪井は押し掛けていた。

消え入るような細かい声で答えていたが、初めて逮捕され、朝の5時から夜9時半まで他の3人の供述に合う調書作成に恫喝・強要があったのは明らかだ、作成された調書には、供述と違うことが書かれている、4人の供述が合うまで、勾留し続けると検事から言われ、検事の作文の疑い、それに○学生の員面調書の本人署名についても… 代理人の質問から、調書改竄が明らかになった、坪井からの質問は特段なかった。

尋問で明らかになったのは、バイトに使うライターを持っていたが油切れで点火しないもの、燃やせ殺せなど云っていない、少量の酒を飲んだだけで、坪井の言う騒ぎには加わらず川で食器洗いをしていた。

坪井は激越な被害・処罰感情で被害届けをした、逮捕直後に3人の男子学生の親はそれぞれ弁護士を付けたが、謝罪した女性は、生活から弁護士を付けられなかった。被害届けを鵜呑みにした警察に、起訴回避すべく3人は示談金請求に応じた、女性は謝罪をしたが、要求賠償金には応じなかった、その後続く坪井の執拗な請求から女性と親は謝罪と慰謝料10万円を提示したが、坪井は因縁を付けて多額の損害賠償請求訴訟を提訴した。

逮捕事実がマスコミ報道されたなら、無実を訴えても多くの弁護士は、謝罪と示談成立が弁護活動と心得ている、この燃やせ殺せ狂言事件は、犯罪者が被害者を装う申告から調書改竄がされ、加害者(被害者)は社会制裁・抹殺される点でも。我が再審事件と同種同根だ、被害感情という曖昧・不可解なものから作られる犯罪は多い。

最後列の傍聴席にいたが、懐の録音機が電池切れでピーと鳴った、この微かな音を裁判長は聞き咎めて消去騒動となった、多くの職員に取り囲まれ消したが、さいたま地裁の記録閲覧のメモ取り禁止の事実、また我が民事裁判でも尋問調書改竄がされており防禦行為であると抗議した、危うく東京高裁の転び公妨で今も拘置されている大高さんの二の舞になるところだった、しかし村主幸子裁判長の地獄耳には驚いた。